

今堀先生の予言

作家 瀬戸内寂聴

かねてその日の来ることは覚悟していたものの、今堀先生の訃報は、やはり衝撃的であった。殊に最後に二度お見舞いに上るつもりで広島へ行ったのに、二度とも透析の日に当たっていてお逢い出来なかったのが、かえすがえすも残念だった。

亡くなられた後、御遺族から伺ったお話では、先生は見舞客が来ると、つとめて快活を装い、お元気に話されるけれど、その後では必ず、多量の出血・下血に見舞われ、衰弱の度を著しく深められたという。

私がお見舞に上った折も、いつもまるで病人とは思えない快活さでいきいきとお話なさるので、私はいつでもかえって、励まされているような気持ちになって帰ったものだった。そしてその度、私の見舞を先生が喜んで下さったとばかりいい気になっていた。そのことが先生にとって、どれほど後の衰弱をもたらすかなど想像したこともなかった。何という無神経だったかと恥じいらすには居られない。稀にお電話しても、先生は必ずあの少し癖高い明るい声でいきいきと話されたものだった。



た。

ところが四月頃、私が電話で別れた夫酒井悌の死について話した時、先生の声はこれまで聞いたことのない投げやりな調子で暗いお声で

「知っていました。いいですよ、あつさり死ねて。羨ましい位だ。ほくももういい加減で死にたいですよ。こんな蛇の生殺しみたいな状態で生きていたってかなわない」とおっしゃった。私は一瞬、受話器を取り落としそうになった。

そういう弱音は決してこれまで吐かれたことがなかったし、知人の死に対して、こんな冷たい声を出されるのも、いつもの先生には考えられないことだった。余程、病勢が進んでいるのだと察しられた。私が二度、広島行をして適わなかったのはその後であった。

つい先日、佐藤長先生と、今堀先生のことを語りあった。おふたりがたてつづけに学士院賞を受賞された時、私はこの古い畏友たちの為に、祇園に一席設けてお祝いのことがある。その時の今堀先生の輝くようなお顔や若々しいお話ぶりを、遺された二人でしみじみなつかしんだものだった。その時、佐藤先生は

「今堀さんくらい、ほくの学問を理解してくれていた人はいなかった。いつでも、論文を読むとすぐ丁寧に読みこんで、実に的確で厳正な批評を書いてよこしてくれた。学士院賞の時も、これは必ず、学士院賞をとられるでしょうと、予言して来てくれましたよ。ほくは全くそんなことを考えていなかったもので、本当にそれが来た時には、今更乍ら、今堀さんの批評と予言を思い出して驚きましたね」といわれた。更に

「今堀さんくらい、すばらしい学者は、今の日本に少ないですよ」と言葉をつづけられた。日頃は寡黙で、自誇主張など決してなさらない、今堀先生とは正反対の佐藤先生にしては珍しく感情的な発言だった。ただし今堀先生は、私の文学につ